

総括 調査結果からみた大学院GP・循環システムの課題と展望

1. 調査結果から把握できた大学院修了生の実態

1) 大学院修了生が大学院の学びで得られたこと

調査の結果から、大学院修了生は大学院で学んだことにより、社会福祉の現場で働く上での自分自身が向上したことを実感していることが把握できた。

具体的には、「視野が広がった」、「客観的な見方ができるようになった」など、自分自身が働く上でのポテンシャルが高まったと評価している。

演習授業や講義で、社会福祉に関する具体的な知識や技術について学んだこと、修士論文をまとめていく上で受けた指導により、具体的な知識や技術を身に付けることができたこと自体も一定評価しているが、それとともに、幅広い観点から物事を見ること、問題や事象を客観的に捉える姿勢などを身に付けることができたことを評価している。

2) 大学院修了生が大学院の学びで得られなかったこと

一方、大学院では十分に身に付けることができなかったと感じていることについては、上記に示した「広くなった視野」「客観的に物事を見ること」などを実践に活かしていく力量が十分得られていないと感じていることがわかった。

具体的には、「まわりに自分の意見を聞きいれるように説得する」力量や、「現場の将来展望を描く」といった力量がまだまだ身に付いていないということである。

このことは、修了生がこれから入学する大学院生にとって、大学院に何が求められるかを聞いた回答からも共通して把握できた。つまり、これから大学院に入学してくる社会人は、「現場の課題を発見し、今後の方向性を見出す力を身につけること」を期待しているということである。自分は、そこまで身に付けることができなかったが、本当はそこが一番身に付けたかったという思いの表れと考えられる。

3) 大学院修了生がこれからの大学院に期待すること

聞き取り調査の結果から、大学院を修了し現場に戻った方達が、大学院修了後も修士論文で取り組んだ研究やさらに高度な学びの継続を望んでいることが把握できた。実際には、大学院を修了してしまうと、なかなか大学院と関わりをもつことができていないと感じている。時間の経過とともに、学びの継続、研究の継続の意思や期待が薄れてしまい、その結果として、大学院で学んだこと、研究したことが、修了後に十分活かすことができていないと感じるに至っている。

修了生が大学院に対して抱いている期待としては、現状の研究生や科目履修生の制度だ

けでなく、もっと気軽に大学院修了生が大学院と関わりをもつことができ、修了後も学びや研究の継続を可能にする制度や仕組みの整備である。

2. 大学院GP・循環システムの課題

今回の調査は、夜間開講の社会人を対象とした専攻を修了した方達を対象に実施したものである。大学院には、社会人院生だけでなく、学部からの入学生や留学生もいることから、大学院における教育内容、方法のあり方については、すべての院生を念頭におき総合的に考える必要があるが、ここでは、主に社会人を対象とした大学院の今後のあり方について、調査結果をもとに以下の3点に整理して述べる。

1) 社会人の実践力を高める大学院での学びの内容と方法の工夫

今回の調査結果から、社会福祉や保健・医療の現場で働く社会人にとって、大学院での学びを通じて、それぞれの現場における困難な状況を解決していく実践的な力や組織の将来展望を描き、それを実現していく力をつけることを求めていることが把握できた。

このような社会人大学院生のニーズに対応して、大学院としては、それぞれの現場における課題を客観的に把握し解決していく力、現場の将来を展望する力とそれを実現していく力が身につけられるような教育内容、方法を工夫・充実していく必要があると考えている。

大学院の教育改革支援プログラムとして2008年度より取り組みは始めている、ケース教材を用いた討論重視型の演習授業はその一つであるが、それだけでなく、院生が様々な現場を訪れて学ぶインターンシップなどの機会やスーパービジョン教育などを今後さらに検討していく必要があると考えている。

2) 大学院修了生の学びの継続の支援

大学院修了生が修了後も学びや研究を継続したいという思いを強く持っていることが把握できた。大学院としては、その修了生の思いを受け止め、様々なかたちで修了生が大学院に関わるができる機会をつくっていききたいと考えている。

大学院には、「実務家の参加する研究会」と称する、教員、修了生や様々な現場の方達の参加する研究会が既に10以上あり、会合を行う場所の提供や会合開催の広報などについて大学院として支援を行っている。しかし、参加している修了生、現場の方達の数はまだ少なく、限定的である。そこで、今後は、さらに多数の修了生が研究会活動に参加できるように、新たな研究会づくりを奨励するとともに、会の活動内容や会合開催案内を修了生をはじめ現場の方達に広く知ってもらえるように、ホームページやメーリングリストを通じて、広報していくことが必要と考えている。

また、科目履修や一般にも公開する特別講義などをインターネットによるオンデマンドやテレビ会議システムなどの方法で受講できるように工夫し、キャンパスに通わなくても

自宅や職場で学ぶことができる仕組みについても、今後検討していきたい。

3) 大学院修了生＋福祉現場＋大学院の循環システム

大学院修了生は、大学院にとっての財産の一つと考えている。これまでも、大学院修了生に、大学院の教育や研究活動に協力、連携をお願いし、実施してもらっているが、まだまだ数や内容は限定的である。

今回の調査で、修了生が、今以上に大学院に様々なかたちで関わりたいと考えていることが把握できた。大学院としては、修了生のそれぞれの現場での実績を大学院教育や大学院が社会と連携して実践していく活動に、活かしてもらう機会を広げていきたいと考えている。

昨年度(2008年度)より新たに開講している、「福祉サービスマネジメント特講Ⅰ」では、修了生をはじめ社会福祉、保健・医療の現場で活躍している方々にゲスト講師をお願いする講義を実施している。現場実践を直接学ぶことができる講義として、受講生からは好評を得ている。今後、このような修了生に教育に参加してもらう機会をさらに充実していきたいと考えている。

さらに、現役院生を修了生の現場でインターンシップとして受け入れてもらうことや、修了生の現場をフィールドとした研修会や研究会への協力などの実施を、今後検討していきたい。

大学院 GP の取り組み



大学院 GP フォーラム 08.2.



GP フォーラム分科会



実務家によるリレー講義と討論



ケースメツド演習